



日仏地方自治フォーラムに参加して

かわぐち
川口市長
岡村幸四郎

はじめに

去る1月22日、フランス上院のあるパリのリュクサンブール宮クレマンソーの間で開催された日仏地方自治フォーラムに参加するため、京都市の細見吉郎副市長と共にフランスを訪問しました。日程は、1月20日の夕方にパリ入りし、翌21日にポワティエ市にある「リセ・キョウト」を訪問。そして22日は日仏地方自治フォーラムに出席し、翌23日には帰国の途につく、実質2日の忙しい日程でした。しかし、充実した有意義なフランス訪問となりました。

リセ・キョウトについて

1月21日は、ポワティエ市にある「リセ・キョウト」を訪問しました。ポワティエ市は、フランス西部に位置するポワトゥー・シャラン

ト州の州都で、パリのモンパルナス駅からTG Vで1時間30分程の距離にある面積約42km²、人口約9万人の都市です。

この「リセ・キョウト」ですが、「リセ」とはフランス語で「高校」を意味します。つまりフランスにあるにもかかわらず「京都高校」という学校名が付いているのです。それは、化石燃料を使用せず再生可能エネルギーを使用することで温室効果ガスの排出ゼロを目指すなど、京都議定書の趣旨に沿った設計や運営をすることに由来しているようで、またヨーロッパ初の取り組みでもあるそうです。

「リセ・キョウト」で私たちを出迎えてくれたのは、先の大統領選挙で現サルコジ大統領に惜敗したセゴレーヌ・ロワイヤル州議会議長でした。私たちのために昼食会を主催してくれました。1時間足らずでしたが、議長として推進している同州の緑増加キャンペーンの一環としてかわった同校のプロジェクトや、同州のデザートワインであるピノ・デ・

給仕はすべて同校ホテル科コース1年生の手によるもので、その味や盛り付け、サービスにさすがフランスだと感嘆しました。続いてアラン・ゼヌー校長から同校の概要について説明をいただきました。校舎および寄宿舎は最もエネルギー効率を得られるように配置されており、建物についても木材を多く使用するとともに、熱効率を考慮して壁厚41cmに対し26cmもの厚さの断熱材を施しているとのことでした。また校舎の中心にあるアトリウムは自然光を取り入れるためガラス天井となっていました。夏に室温が27℃以下



「リセ・キョウト」アトリウムにある校内配置模型の前で説明を受ける筆者（左）

上になると屋根の一部が自動開口し自然換気するようになっているとのことでした。さらに冬の暖房は、厨房などの廃熱を回収し利用するほか、廃棄物の焼却熱を利用し95℃の熱水を作り、それを1000m³の貯水槽に保管し、熱交換器によってその熱を取り出すことで賄っており、結果として年間を通してエアコンフリーを実現しているとのことでした。

これらは、「リセ・キョウト」の環境対策の一例ですが、建設費はフランスでの通常の高校建設費よりも10%ほど高い約3200万ユーロ（約38億4000万円）、土地は市が州に無償提供したので用地取得費は含まれていないとのことでした。

残念なことに、まだ開校して半年足らずなので具体的な数字は出ていないため何うことができませんでしたが、1年後にどのような成果が公表されるのか、今から楽しみです。

日仏地方自治フォーラムについて

翌22日が日仏地方自治フォーラムです。今回は「地方自治体と持続可能な開発」をテーマにフランス上院議員、自治体職員やNPO関係者など100名を超える参加者を得て、まず序論として「日仏両国の枠組みと地方自治体の取り組みの視点」について日本から国連大学の安井至名誉副学長、フランスから民間団体の持続可能な開発のための諸問題検討会議事リアンヌ・デュポール理事から講演があ



日仏地方自治フォーラム（フランス上院クレマンソーの間）で発表する筆者（右）

り、その後、2部構成で日仏双方の自治体から事例報告と会場を含めての意見交換を行いました。

まず、円卓会議1「CO₂排出量削減の取り組み」では、日本側は京都市の細見副市長が、フランス側はダンケルク都市共同体のニコル・ゴンティエ環境・都市整備局長が発表を行いました。京都市の先進的取り組みはフランス側にとっても大いに刺激になったよう会場から多くの質問が出ました。私が特に興味を引かれたフランスの取り組みは、個人住宅の省エネを進めるため、上空から赤外線によるサーモグラフィ撮影を行い、各住宅の断熱効果が一目で分かる地図を作成・公表し、啓発を行ったというものです。フランスでは個人で家を建てる人が多く、しかも断熱をきちんとしていない事例が多々見受けられるために実施したのだということでした。

次に、円卓会議2「廃棄物リサイクル促進の取り組み」では、日本側からは私が、フランス側はニース市のピエール・ポール・レオネリ助役と円卓会議1に引き続きゴンティエ局長が発表を行いました。ごみを減らし、資源化を推進するのは両国に共通する喫緊の課題であること、その解決には市民に積極的な情報提供を行い、理解と参加を求めるという地道な取り組みが重要だということで見解が一致しました。

しかし、私の率直な感想を申し上げますと、地方レベルでは、市民の意識、取り組み

ともに日本の方がよほど進んでいると感じました。ごみの分別一つとっても、発表した自治体ではまだ3種類程度ですから、日本には到底及びません。それと大きく異なるのは市民意識の差です。私は市民に「まずはわがまちをきれいにしよう、まちをきれいにすることは、心をきれいにすることだ」といつも申し上げているので、フォーラムでもそのように発言しましたが、フランスでは、まちをきれいにするのは役所の仕事、そのために税金を払っているのだという意識が強いそうです。さらに「パリの街並みは素晴らしいのですが、足元を見れば、たばこの吸殻や犬のふんが散乱していて、とてもきれいとは言えない。私たちの市ではまちを挙げてクリーンタウン作戦をやっています。ごみを自分の手で拾うことによって、もうごみを捨てようとする気を起こさせない。」と、暗にパリの皆さんも自分たちでごみを拾ったらいかがかと申し上げましたが、なんとこの発言が参加者には結構ショックだったようです。パリに20年以上在住し翻訳の仕事をしている日本人女性からは、「よくハッキリ言ってくれました、スッキリしました。」と言われました。日本大使館の方からも、「とかく外交辞令で終わってしまいがちだったが、むしろこうした率直な発言はフランス人にとっては好まれる。」と評価していただきました。やはり日本人も自分の意見をきちんと言うことが、相手からも評価されるのだということを感じた次第です。

パリ市内にて

パリ市内を移動するとき車中から目に付いたのが「セール中」の貼り紙です。それがほとんどの店舗に貼ってあるのです。不思議に思って聞いてみたところ、国が実施時期や割引価格の設定根拠まで決めてセールをしているとのこと。確かに公平かもしれないけれど、そのようなことまで国が決めるのは、フランス革命で自由を勝ち取った国というイメージからすると意外と中央集権的だと感じました。

また、夕食後に紅茶を注文したのですが、どのお店でも南部鉄瓶をほうふつとさせる鉄製の急須が出てきました。今、フランスでは第2次といわれるほどジャポニズムがちょっとしたブームなのだそうです。日本食のレストランが、パリ市内だけで約600店あるとのことでもあります。そういえば、駅で立ち寄った売店にも日本のマンガのフランス語版が当然のように棚に並べられていました。

おわりに

今回のフランス訪問につきましては、主催者であります財団法人地方自治国際化協会・パリ事務所（クレアパリ）の鳴田謙二所長をはじめ職員の方々に大変お世話になりました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

私たち地方自治体においても、国内だけでなく海外の先進的な制度や取り組みを収集・分析し、取り込んでいくことがますます重要となってきており、特に環境分野についてはその傾向が顕著です。そのような中、クレアパリが両国自治体の直接的な交流の場を提供していることは、日仏双方の自治体にとって非常に有益なことであり、今後も私も自治体のスキルアップのために継続していただきたいと考えています。

また、全国市長会事務局の皆さんにもさまざまな面でご配慮をいただきお世話になりましたこと、この場をお借りしてお礼申し上げます。報告を終わります。



フォーラム終了後に上院内で開催されたカクテルパーティで意見交換する筆者（左から2人目）